ＩＳＳＮ 0285－4767

北海道考古学会だより

第　132　号
２０２２．８．31

目　次

2022年度　第59回総会の開催報告について…… 1
第８回 北海道考古学会賞・北海道考古学会奨励賞の報告について …… 5
「北海道考古学会賞受賞の御礼」　大島　直行…… 6
2022年度 研究大会
「北海道・北東北の縄文遺跡群」世界遺産登録記念
『北海道の縄文世界遺産と考古学』の開催報告 …… 7
研究活動・動向 …… 8
「縄文世界遺産のこれから－2022年度研究大会に参加して－」　小杉　康…… 8
「コリャークのペゲックンとオホーツク文化の球状石製品」　種石　悠…… 9
「遺跡保存庭園」　守屋　豊人…… 10
事務局より …… 11
(1) 第９回学会賞・奨励賞の推薦について …… 11
(2) 第59輯学会誌の投稿募集について …… 12
(3) だより掲載原稿の募集について …… 12
(4) 運営委員の推薦について …… 12
(5) 会費納入について …… 12

2022年度 北海道考古学会
第59回 総会の開催報告について

５月14日（土）10時より、北海道大学学術交流会館２階講堂にて、本年度の定期総会が開催されました。会員数297名に対して、本人出席67名、委任状出席95名、合計162名で、総会成立要件である会員数の５分の１以上の出席を得たため、総会は成立しました。議長には第５地区の菅野修広会員を選出し、下記の議案について審議されました。この結果、下記の通り原案通り承認されましたので、ご報告いたします。なお、当日審議の中で、２号議案の収入合計額に誤りがありました。４月25日に実施された監査で、監査委員から金額誤記の指摘を受け、修正し監査終了しましたが、議案作成の際に未修正の状態で編集・印刷されてしまいました。今後は、運営委員会内で相互確認を行うことで適切に対応いたします。

１号議案　2021年度会務報告

(1) 事業報告

ア　第58回定期総会

書面議決
参加者　：131名

イ　2020・2021年度研究大会

インターネット配信（YouTube による配信）
配信期間：2021年９月25日（土）～ 10月17日（日）
テ ー マ：「北海道に残る二万三千の竪穴」
内　　容：基調講演２名、研究発表３名、総評１名の動画配信による北海道の大規模竪穴群をテーマにした研究大会
参 加 者：全体の視聴回数1775回（１発表平均222回）

ウ　運営委員会

回数	開催日	主たる議題
第１回	５月　８日	総会・研究大会・会誌など
第２回	５月　18日	総会（書面議決）・研究大会など
第３回	６月　26日	総会（書面議決）の結果・運営委員会の引継ぎなど
第４回	７月　24日	研究大会・会誌・だよりなど

第５回　　10月　２日　　研究大会・会誌など
第６回　　11月　６日　　研究大会・会誌など
第７回　　12月　18日　　研究大会・会誌・学会賞など
第８回　　２月　23日　　研究大会・会誌・だより・学会賞など
第９回　　３月　27日　　研究大会・会誌・だより・学会賞など

エ　月例研究会

新型コロナ感染症の感染拡大防止対策として、中止となった。

オ　遺跡見学会

休　　止

カ　遺跡調査報告会

新型コロナ感染症の感染拡大防止対策として、中止となった。

キ　連絡紙『北海道考古学会だより』の発行

130号：2021年８月31日発行
131号：2022年３月31日発行

ク　学会ホームページ

2021年３月まで（12ヶ月間）更新回数：９回

ケ　会誌編集委員会の活動

会誌『北海道考古学』第58輯の発行（2022年３月発行　360部）

コ　特別委員会の活動

なし

(2) 2021年度収支決算報告

収　入

項　目	費　目	予算額(A)	決算額(B)	増・減(▲)	備　考
会　費	会　費	1,320,000	787,000	▲533,000	・2021年会費納入分　一般(5,000円×90件)、学生(3,500円×1件)＝453,500円 ・過年度会費納入分　一般(5,000円×66件)、学生(3,500円×1件)＝333,500円
事業収入	研究大会収入	200,000	168,000	▲32,000	2020・2021研究大会資料集 販売収入　84部×2000円
	遺跡見学会収入	0	0	0	事業休止のため予算なし
	遺跡調査報告会収入	0	0	0	事業休止のため予算なし
	会誌等販売収入	75,000	109,860	34,860	会誌委託販売等
	小　計	275,000	277,860	2,860	
雑　入		9,023	0	▲9,023	
繰越金		1,098,328	1,376,017	277,689	2022年度以降会費納入分〔一般（5,000円×230件）、学生（3,500円×０件）＝1,150,000円〕等
合　計		2,702,351	2,440,877	▲261,474	

支　出

項　目	費　目	予算額(A)	決算額(B)	増・減(▲)	備　考
事業支出	研究大会費	300,000	8,800	291,200	※新型コロナ感染症のためオンライン開催　賞状印刷
	遺跡見学会費	0	0	0	事業休止
	研究会費	35,000	0	35,000	※新型コロナ感染症のため対面開催不可
	遺跡調査報告会費	0	0	0	事業休止
	会誌印刷費	650,000	778,920	▲128,920	第57輯　360部／振込み手数料
	だより印刷費	101,000	61,980	39,020	130号／振込み手数料
	ホームページ費	4,000	4,125	▲125	プロバイダー契約料、更維持管理費／振込手数料
	小　計	1,090,000	853,825	236,175	

事務支出	報償費（総会費）	50,000	50,000	0	学会奨励賞
	委員会費	35,000	9,100	25,900	運営委員会会場費
	消耗品費	5,000	7,699	▲2,699	文房具代・コピー代等
	通信費	300,000	295,616	4,384	会誌･だより発送費･葉書切手代金等含む
	賃金	10,000	0	10,000	会誌･だより等の発送作業
	小計	400,000	362,415	37,585	
基金積立金		60,000	60,000	0	60周年記念研究大会積立金
予備費		350,000	0	350,000	
合計		1,900,000	1,276,240	623,760	

2021年度決算

項目	費目	予算額(A)	決算額(B)	差引額(B−A)	備考
	収入総計	2,702,351	2,440,877	▲261,474	
	支出総計	1,900,000	1,276,240	▲623,760	
決算額差引	収入総計（B）－支出総計（B）			1,164,637	

2021年度北海道考古学会基金会計

項目	費目	支出額	基金積立額	基金総額	備考
基金	名取氏寄付金		420,000	420,000	
	石川氏寄付金		320,000	740,000	
	佐藤氏斉藤氏寄付金		100,000	840,000	
	北構保男氏寄付金		20,000	860,000	平成17年5月29日10,000円送金 平成18年3月22日10,000円入金
	宮下正司氏寄付金		10,000	870,000	平成20年3月31日10,000円入金
	臨時積立金		200,000	1,070,000	
	50周年記念研究大会積立金		250,000	1,320,000	2012年度積立
	保存対策費積立金		100,000	1,420,000	2012年度積立（過年度支出分補填）
	保存対策費積立金		100,000	1,520,000	2013年度積立（過年度支出分補填）
	会員寄付金（匿名）		500,000	2,020,000	2021年8月23日500,000円入金
	菊池徹夫氏寄付金		50,000	2,070,000	2021年11月19日50,000円入金
	60周年記念研究大会積立金		420,000	2,490,000	2015年度より積立
合計				2,490,000	
過年度支出	南茅部町埋蔵文化財団調査団事務所被災支援金	77,000		2,413,000	2003年度支出
	鷲の木５遺跡保存対策費	160,000		2,253,000	2003年度支出
	鷲の木５遺跡保存対策費	60,000		2,193,000	2003年度支出
	40周年記念研究大会費	240,000		1,953,000	2003年度支出
	50周年記念研究大会費	250,000		1,703,000	2013年度支出
合計		787,000			
基金残高				1,703,000	

(3) 2021年度監査報告

監　査　報　告

北海道考古学会の2021年度会計の監査を実施した結果、適正に処理されていることを確認したので報告します。

令和　4年　4月　25日
監査委員　瀬川　拓郎
監査委員　酒井　秀治

2号議案　2022年度会務計画

(1) 事業計画案

ア　基本方針

①北海道考古学の発展のため、会誌の発行、大会・月例研究会などの充実を図る。
②考古学研究の諸課題が生じた場合、「特別委員会」を設置し、対応する。
③だより・ホームページなどにより会の活動や研究成果を情報発信する。
④会費納入の適正化と、財務基盤の安定化を図る。

イ　2022年度事業計画

①　研究大会

日　　時：2022年５月14日（土）11時～ 17時
会　　場：北海道大学　学術交流会館　講堂
テ ー マ：「北海道・北東北の縄文遺跡群」世界遺産登録記念
　　『北海道の縄文世界遺産と考古学』

②　遺跡見学会

休　　止

③　遺跡報告会

休　　止
（ただし、2022年度の発掘件数の統計などは各地域委員が実施し、それらの情報は、運営委員会で保管、会誌で示すような活用をする）

④　月例研究会

時　　期：運営委員会開催日の15時開始　（※新型コロナ感染症の拡大防止を考慮して実施の模索をするとともに、発表者があった場合に開催する）

⑤　会誌「北海道考古学」第59輯の発行

発　　行：年１回
時　　期：2023年３月　350部発行

⑥　連絡誌「北海道考古学会だより」の発行

発　　行：年２回（第132号、第133号）
時　　期：（予定）2022年８月、2023年３月

⑦　ホームページの管理運営

(2) 2022年度予算案

収　入

項　　目	費　　目	2022年度予算額(A)	2021年度決算額(B)	増・減(▲)	備　　考
会　　費	会　　費	1,492,000	787,000	705,000	2022年度会費 一般(5000円×297人)・学生(3500円×2人)
事業収入	研究大会収入	400,000	168,000	232,000	2022研究大会資料集販売200部×2,000円
	遺跡見学会収入	0	0	0	事業休止
	遺跡調査報告会収入	0	0	0	事業休止
	会誌等販売収入	100,000	109,860	▲9,860	会誌委託販売等
	小　　計	500,000	277,860	222,140	
雑　　入		10,000	0	10,000	
繰 越 金		1,164,637	1,376,017	▲211,380	
合　　計		3,166,000	2,440,877	725,760	予算額千円未満切捨て

支　出

項　　目	費　　目	2022年度予算額(A)	2021年度予算額(B)	増・減(▲)	備　　考
事業支出	研究大会費	770,000	8,800	761,200	講師費用弁償等
	遺跡見学会費	0	0	0	事業休止
	研究会費	35,000	0	35,000	研究会会場費等
	遺跡調査報告会費	0	0	0	事業休止
	会誌印刷費	700,000	778,920	▲78,920	第58輯　360部／振込み手数料
	だより印刷費	137,000	61,980	75,020	131号･132号･133号／振込み手数料
	ホームページ費	4,200	4,125	75	プロバイダー料、維持管理費／振込み手数料
	小　　計	1,646,200	853,825	792,375	

事務支出	報償費（総会費）	50,000	50,000	0	学会奨励賞
	委員会費	30,000	9,100	20,900	運営委員会・編集委員会出席用交通費・会場費
	消耗品費	8,000	7,699	301	文房具・コピー・賞状等
	通信費	300,000	295,616	4,384	会誌・だより発送費・葉書切手代金等
	賃金	0	0	0	会誌・だより等の発送作業
	小計	388,000	362,415	25,585	
基金積立金		60,000	60,000	0	60周年用積立金
予備費		1,021,800	0	1,021,800	
基金補填金		50,000	0	50,000	2022年度分から補填開始（補填額733,000円）
合計		3,166,000	1,276,240	1,889,760	

2022年度北海道考古学会基金会計

項目	費目	支出額	基金積立額	基金総額	備考
基金	名取氏寄付金		420,000	420,000	
	石川氏寄付金		320,000	740,000	
	佐藤氏斉藤氏寄付金		100,000	840,000	
	北構保男氏寄付金		20,000	860,000	2005年5月29日10,000円送金 2006年3月22日10,000円入金
	宮下正司氏寄付金		10,000	870,000	2008年3月31日10,000円入金
	会員寄付金		200,000	1,070,000	
	臨時積立金		250,000	1,320,000	2012年度積立
	50周年記念研究大会積立金		100,000	1,420,000	2012年度積立（過年度支出分補填）
	保存対策費積立金		100,000	1,520,000	2013年度積立（過年度支出分補填）
	保存対策費積立金		500,000	2,020,000	2021年8月23日500,000円入金
	会員寄付金（匿名）		50,000	2,070,000	2021年11月19日50,000円入金
	菊池徹夫氏寄付金		420,000	2,490,000	2015年度積立開始（年60,000円）
	60周年記念研究大会積立金			2,490,000	
合計				2,413,000	2003年度支出
過年度支出	南茅部町埋蔵文化財団調査団事務所被災支援金	77,000			
	鷲の木5遺跡保存対策費	160,000		2,253,000	2003年度支出
	鷲の木5遺跡保存対策費	60,000		2,193,000	
	40周年記念研究大会費	240,000		1,953,000	2003年度支出
	50周年記念研究大会費	250,000		1,703,000	2013年10月支出
合計		787,000			
基金残高				1,703,000	

第８回 北海道考古学会賞・北海道考古学会奨励賞の報告について

第８回学会賞ならびに奨励賞の受賞者選考は、2021年度に選考委員会を複数回開催し、進められました。この賞は、北海道およびその周辺地域の考古学の研究、北海道考古学会の発展に大きく貢献した会員または団体の功績を称える学会賞と、同地域の考古学の研究に大きく貢献した若手研究者の研究活動を奨励する奨励賞があります。

選考委員会での協議の結果、学会賞は大島直行氏に決定し、奨励賞は「該当なし」という結果となりました。表彰式は、第59回総会の５月14日（土）に実施しました。

選考の決定理由は、次のとおりです。

学会賞　大島直行氏

【選考の決定理由】

大島直行氏は、千歳市教育委員会を経て1978 ～ 1994年に札幌医科大学助手として考古学と人類学の研究・教育に従事し、この間、伊達市有珠モシリ遺跡などの調査によって続縄文文化の解明や、縄文人

の齲歯頻度の比較から本州と北海道の食性の違いを明らかにする大きな学問的成果をあげている。1995年に伊達市教育委員会主幹、2005年に伊達市噴火湾文化研究所長に就任してからは2021年に世界遺産登録された史跡北黄金貝塚の整備などに携わり、「市民のための遺跡」を標榜した啓発事業を実施した。

近年は、脳科学や心理学、文化人類学、神話学などを援用した考古学研究によって、考古学研究の新境地を切り開くとともに、その著作などを通して、より広い層が北海道考古学への理解と関心を深めることに貢献した。北海道考古学に多大なる貢献をもたらした研究者の一人である。

そのほか、これまで日本人類学会評議員、日本考古学協会理事を歴任し、日本考古学協会では2014年に伊達大会を誘致し、大会会長を務めている。また2013年～2017年まで北海道考古学会会長として学会の活動と発展に尽力した。これまでの教員生活や学会活動を通じた文化財保護活動・人材育成・社会活動は、北海道の考古学界に対し大きな寄与・貢献となっており、直接的および間接的に北海道考古学の発展に大変に寄与してきたと評価された。

奨励賞　該当者なし

【該当者なしの理由】

当学会賞は「北海道考古学会は北海道及びその周辺地域の考古学区の研究、もしくは北海道考古学会の発展に大きく貢献した会員または団体の功績を称えるとともに、若手研究者の研究活動を奨励するため「学会賞」を設ける。」（学会賞規則第１条）ために、2014年度に創設された。

これまで多くの推薦に対して選考を重ね、多くの方に奨励賞を送ることができた一方で2021年度に関しては自薦・他薦と応募がない状態であった。そのため規定により「該当者なし」とせざるを得ない状況となった次第である。

奨励賞に対する推薦が増えるように努めるとともに、選考委員会ではより積極的な応募を念願する。

北海道考古学会賞受賞の御礼

大島　直行

2022年度の学会賞受賞を受けましたことに、心からの御礼を述べさせていただきます。ありがとうございました。受賞にあたりましては、菊池俊彦先生をはじめ多くの皆さんの推薦のもとに決められたと伺っております。合わせて御礼申し上げたく思います。

大学を卒業して、すぐに貴会に入会させていただき、会誌の12号に論考をまとめさせていただいたことを思い出します。当時は、故人となられました大井晴男先生から、円筒土器に関します拙いこの論考に対しいろいろご指摘を受け、論文の何たるかをお教えいただいたことが忘れられません。とてもうれしく思います。

それから50年以上の年月が過ぎましたが、いま改めて会誌や「だより」をみてみますと、とても質の高い内容を維持してきたことに気づきます。委員としても働かせていただきましたが、今考えてみますと、気持ちはあったにしても、会の運営に対しては十分な働きができなかったと反省するばかりです。

伊達市に居を構えてからは、考古学という学問が市民の皆さんにどれだけ役に立つことが可能かということに視点が変りました。自分としては、20年ほど前に、長野県考古学会より「藤森栄一賞」をいただいたときに、そのことを強く意識しました。今回の受賞理由の中に、そうした市民への貢献が語られていたことは、私にとりましては、ほんとうにうれしく思いました。改めて関係したみなさまがたに御礼申し上げます。

70歳を過ぎた今、これまでの考古学とは違う取り組みに精進しております。私は、いろいろな場面で「文化」という言葉を使ってきましたが、それの意味を考えて使ってきたわけではありません。このことを恥じると同時に、今回の受賞を契機に、北海道で考古学に取り組むことの意味を、改めて考えてみようと思います。会員の皆様の今後ますますのご活躍を期待いたします。　（伊達市在住）

2022年度研究大会
「北海道・北東北の縄文遺跡群」世界遺産登録記念
『北海道の縄文世界遺産と考古学』の開催報告

2022年度研究大会は、５月14日（土）に北海道大学学術交流会館〔２階講堂〕を会場に、会員、一般合わせて91名の参加者で開催した。

本研究大会は、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が2021年７月28日に世界文化遺産登録となったことを記念し、「①世界遺産登録の各資産の評価と価値を広く認識するとともに、各遺跡調査の考古学的成果を再確認する。②将来に向けた調査・研究の課題、その活用法などの発展を考える。」とし、大会タイトルを『北海道の縄文世界遺産と考古学』として実施した。

基調講演では菊池徹夫早稲田大学名誉教授をお招きし、北海道・北東北の縄文遺跡群を俯瞰して考えるため、登録までの経緯や他の世界遺産との相違について貴重な講演をいただいた。この講演の概要は、日本で登録されてきた世界遺産の歴史と共に「世界遺産とは何か？」、評価基準や証明すべきことを提示し、改めて「北海道・北東北の縄文遺跡群」の登録までの道のりを示した。それは「顕著で普遍的な価値」を農耕以前の狩猟・採集・漁労を生活基盤した社会が定住生活を１万年以上に渡って継続したことを強調したことが登録実現の契機であったと結論づけた。今後の課題としては、第一に東アジア史の中でどのように縄文文化を捉えなおすか、第二に行政や専門家は勿論ボランティアなどの市民、中でも子供達とともに保全と活用への取り組みを行うことが重要であるとした。

研究大会メインでは、世界遺産の構成資産および関連資産を持つ自治体で実践されている５名に、登録までの経緯や世界遺産としての価値も含め史跡全体の考古学的な成果について発表いただいた。

垣ノ島遺跡と大船遺跡は、市立函館博物館の福田裕二氏が発表を行った。垣ノ島遺跡では、縄文早期前半から後期後半に及ぶ各遺構の分布や特徴的な遺物の報告と、史跡整備のポイントと世界遺産としての価値の説明のズレなど課題を示した。大船遺跡では、縄文前期末葉から中期末葉にかけて遺構の重複が著しく、同じ台地を繰り返し利用している状況や文化変容の様子を把握した調査成果を報告した。さらに、新たな調査成果を踏まえた次期整備の必要性を指摘した。

北黄金貝塚は、伊達市教育委員会の永谷幸人氏が発表を行った。北黄金貝塚では、貝塚の発見から現在までの歩みを示し、自然環境の変化への適応をキーワードに縄文前期前葉の縄文海進から前期後葉の海退期における環境変化に伴う貝塚の内容物や漁労・狩猟具の変化、形成地点の変遷を示し、縄文人の儀礼的な性格を持つ遺構について報告した。

入江貝塚と高砂貝塚は、洞爺湖町教育委員会の角田隆志氏が発表を行った。入江貝塚と高砂貝塚では、縄文前期後半から晩期中葉にかけて営まれた両貝塚の変遷を示し、竪穴建物、墓坑、古環境、遺物などと、生業活動を総括した。また、ボランティア団体の充実や地域住民への普及啓発活動の継続、観光資源としてのPR・情報拡散を課題としてあげた。

キウス周堤墓群は、千歳市教育委員会の豊田宏良氏が発表を行った。キウス周堤墓群では、明治後半には存在が知られ、当初はチャシとして認識され指定された経緯や、戦後の調査史とその成果を報告した。さらに、遺跡立地や代表的な周堤墓の概要説明と共にキウスの本質的な価値を３つ指摘し、分布調査の拡大や居住域の解明などを将来的な課題としてあげた。

鷲ノ木遺跡は、森町教育委員会の高橋毅氏が発表を行った。鷲ノ木遺跡では、これまでの調査成果をまとめ、環状列石と竪穴墓域、配石遺構を中心に縄文早期から晩期に及ぶ活動状況と分布状況を報告した。また、遺跡の直下に高速道路を建設したことから、現代社会の営みと史跡保護活動との両立を目指す実例としての意義を示した。

討論では、特に津軽海峡文化圏の影響が強い北海道・北東北の縄文遺跡群の中で北海道独自の文化を念頭に置きながら、集落や祭祀の構造の変化・変遷について議論していただき、今後の調査研究の展望についても触れてもらった。

本研究大会は、①各遺跡の世界遺産としての評価点と考古学的な成果として強調すべき部分を把握することができた点、②世界遺産をきっかけとして、他の自治体を含めて埋蔵文化財全般に目を向ける機運が高まってきた点、そして③それを保存や活用にいかに結び付けていくかの具体的なあり方を示唆的に議論できた点が成果となった。

〔研究活動・動向〕

縄文世界遺産のこれから
―2022年度研究大会に参加して―

小杉　康

本年５月、コロナ禍の終息がいまだ見えてこないなかですが、久しぶりに対面式の学会活動が再開されました。行動制限がいろいろとかかるなかで、様々な工夫をされて実行にこぎつけるために奮闘された委員会の方々をはじめとし、開催にご尽力された皆様方に、一会員としてまずは御礼申し上げたいと思います。他の学会等でもオンライン開催が常態化しています。遠隔地からの参加が楽になり、また主催者側も参加者側も経費的な面でも、これまでにない便利さや有効性を感じるところも確かに多くありました。しかし､物理的な時間と空間を共有するといった行為によってのみ生み出される「場の雰囲気」は他に代えがたく、それが刹那に形成された「知の共同体」であっても、顔を合わせて（あるいは遠くから拝見して)、発生された声の振動を感じて（たとえマスク越しであっても)、その場で聴き・考え・発言することの〈緊張感〉を経験することの大切さを、特に学生や若い会員の方々には強く受け止めていただけたと思います。

さて、研究大会のテーマは時宜を得て『北海道の縄文世界遺産と考古学』でした。基調講演を早稲田大学名誉教授の菊池徹夫先生がおこなわれ、それを受けて構成資産（遺跡）のある各自治体の委員の皆様がそれぞれの遺跡の紹介をされました。縄文遺跡群世界遺産登録推進専門家委員会の委員長を務められた菊池先生は、講演の冒頭に、世界文化遺産への登録が決定されて以降、今回のような趣旨の講演の機会も数を重ねてきたので「同工異曲」になってしまいがちで、と謙遜してお話を始めながらも、終盤には北海道というこの場所・この時期に行うことの意義を盛り込んだ内容で締めくくられ、言葉の本来の意味である「音楽を奏でる技巧は同じでも演奏されたものの味わいが異なる」といった素晴らしい講演でした。私などは大学での講義の延長でパワーポイントなどの映像機器に頼りがちな講演になってしまうことも多いのですが、そのような便利な装置を使わずとも、場の雰囲気を取り込んで聴衆を惹きつける巧みな話術には、講演内容とは別に多くのことを学ばせていただきました。

各構成資産・関連資産の報告をなされた委員の方々は、実際の行政の場面で登録に向けて奔走されてきたご当人でもあるので、菊池先生と同様に、本テーマと同じ内容のお話をしたりご執筆をしたりする機会も特に多かったと思います。そのせいもあるのかもしれませんが、あるいはやっと一息といった安堵感のためかもしれませんが、各資産（遺跡）の説明に自らが食傷気味なのか､「同工異曲」の転じた意味である「見かけや外観が違うようでも内容は似たり寄ったりである」といった、あまり元気のない発表のように感じました。構成資産（遺跡）の解説内容が、現時点で申請時のそれと異なる様では問題かもしれませんが､今後の遺跡の整備や活用を通じて得るであろう新事実やエピソード､それに加えて､今後新たに解明されてゆくであろう縄文文化全般に関する新知見を受けるならば、その評価も自ずと当初の申請書に記述した内容・解説とは変わってくるはずであり、今後のそのような機会での元気な発表を楽しみにしたいと思います。

菊池先生のお話の中で最も印象に残ったのは、以前からも問題とされることが多かった、世界遺産を構成する縄文遺跡がなぜ北海道と青森・秋田・岩手の北東北３県の14町村の17（＋２）遺跡に限定されるかの点についての説明でした。「なぜこの地域か？　なぜ17遺跡か？　ウチの方にはもっといい遺物が沢山あるのに！」（当日資料より引用）といったような批判的な問いかけは､ユネスコに提出する「暫定一覧表」に『北海道北東北の縄文遺跡群』が加えられた当初からよく聞かされました。それに対して地元の縄文研究者のなかからは、その必然性を説明するために、いろいろな考古資料をとりあげて、この地域には縄文文化を通じて実体的なまとまりがあったのだ、といったような極端な説明がでてくることもありましたが、それにはいささか無理があります。菊池先生は講演の前段で、日本国内での世界遺産候補の選定の仕方が、2006年にそれまでの国主導型をやめ、自治体からの提案方式へと変更された経緯を説明されましたが、それを踏まえて、当該道県がその際に（結果的には）17遺跡をもって手を挙げたからである、といった明快な回答を提示されました。そしてそれに加えるならば、確かにこの地域においては、縄文文化のある時期、特に後半期に、いくつかの地域社会が顕在化して、相互に関係性を強める様相を呈します（もちろん、そのような関係の広がりはその地域内に閉じられたものではありませんが)。そのような歴史性を最大限に評価して、縄文文化の全体のなかで、この地域を一つのまとまりをもって今日の私たちが認識し、また現時点においてそこでの縄文遺跡の保存と活用についてのユニークな活動や取り組みをおこなうことによって、人類の遺産としての縄文遺跡を核とするところの開かれたコミュニティが形成されている、といった点をもって今回の世界文化遺産への登録が実現されたと言えるのではないでしょうか。

（札幌市在住）

〔研究活動・動向〕

コリャークのペゲックンとオホーツク文化の球状石製品

種石　悠

北海道立北方民族博物館季刊誌『Arctic Circle』122号（2022年３月18日発行）に、呉人惠館長による巻頭エッセイ「トナカイ遊牧民の石ころ崇拝」が掲載された。考古学的に示唆に富む内容だったので紹介したい。主要な箇所を次に引用する。

「私はふと、コリャークの毛皮製住居中央の炉端に置いてあったいくつかの石のことを思い出した。（中略）

コリャーク語では「ペゲックン peŋewwən」と言う。後ろの「ックン」が「石」の意味。前の「ペゲ」は、「ピン - piŋ-（粉，灰）」と同源だとコリャークは言う。炉や一家の主人を守るものとされるからしい。言語学的には怪しいが、そう言いたい気持ちもわかる。通常、一家に複数個ある。楕円形、円形が多いが、三角形もあるそうだ。釣り針にかかったとか、カラマツの上に乗っかっていたとか、ハバロフスクの森の中で見つけたとか、わざわざ石の由来が語られたり、トナカイの骨髄が供物として塗られたりすることから、「ただの」石でないことは容易に想像がつく。」

このカムチャツカ半島のトナカイ遊牧民コリャークの「ペゲックン」（写真１）を見て驚いた。いくつかある石のうち、直径３cm 程の一番小さな石がオホーツク文化期の遺跡から出土する、「石弾（石製の投弾）」とされる球状の石製品（写真２・３右）によく似ていたからだ。

ところで、この球状石製品の用途を石弾とすることに躊躇している。断面が正円になるまで丁寧に成形した石を、鳥や動物に向けて投げつけたとは思えないからだ。ボーラ説もあるが、複数出土例は大きさが不揃いで用をなさないし、ボーラに装着するなら自然石で事足りる。遊戯具や儀礼具など、別の用途を探ってはどうか。

なお、川西オホーツク遺跡出土の有孔球状土製品（写真３左）のように、素焼きで量産できるものは土弾（土製の投弾）の可能性もある。

オホーツク式土器の円孔文や円形貼付文、また有孔円板から、オホーツク文化のなかに円形を特別視する心性があったことがうかがえる。球状石製品は、オホーツク文化人の護符だったのではないかと想像している。

（網走市在住）

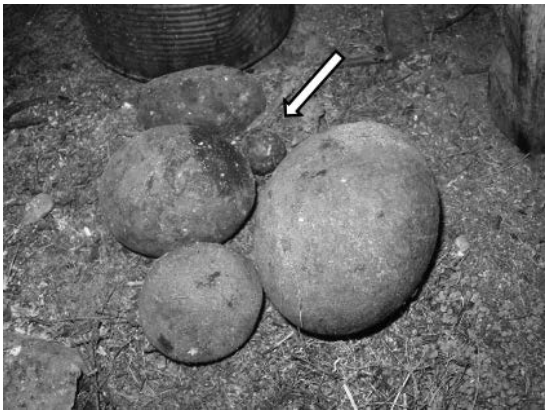

写真１　ペゲックン（撮影・呉人　惠）

写真２　球状石製品（モヨロ貝塚）

写真３　右；球状石製品、左；有孔球状土製品
（川西オホーツク遺跡）

〔研究活動・動向〕

遺跡保存庭園

守屋　豊人

はじめに

本稿では雪解け時にみられる遺跡保存庭園の様子と窪地を紹介する。そのために、春先の遺跡保存庭園でみられる地形や草花の様子、窪地が過去に発掘調査され、竪穴住居址と位置付けられた成果の概観、最後に、窪地となった竪穴住居址の竪穴規模について、構内の竪穴住居址の発掘調査成果から推測し、私見を述べる。

写真１　遺跡保存庭園の入り口

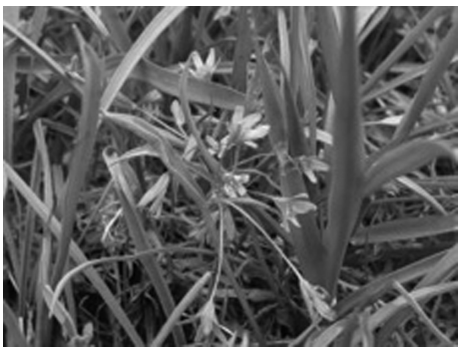

写真２　遺跡保存庭園でみられるキバナノアマナ

写真３　春先に観察できる河谷

１　北大構内の遺跡保存庭園

北大構内のほぼ中央、札幌市北区北18条西７丁目付近には、遺跡保存庭園がある（写真１）。樹木や草花で地表が覆われた遺跡保存庭園の範囲は、野球場約２個分の広がりがある。開発行為から保護されていることによって、雪解け時に草花が群生する様子、旧地形、窪みがみられる。

雪解け時にみられる草花では、黄色い花があげられる。本州北部から北海道でみられる草本で、キバナノアマナである。くるぶしより高い位置まで緑の茎が伸び、一輪の花の大きさは約２cm である（写真２）。葉の緑色との対照性が目を引く。

遺跡保存庭園の西端では河谷がみられる（写真３）。約10m の幅で、S 字状に湾曲した河谷が春先の地表で観察できる。構内を流れていたサクシュコトニ川の旧流路と推測する。４月の初旬では、雪解け水が河谷内にみられた。キバナノアマナが群生していた場所は、河谷に隣接している高まりである。この高まりでは、窪みがいくつかある。

高まりにみられた窪みは、目視の限りでは長軸約３m ～約６m の規模である。すでにご存じの方がいると思われるが、この窪みは遺構（擦文文化の竪穴住居址と後述で推測）である。住居の竪穴が長い年月をかけて地層によっておおわれた状態と考える。窪地の中央には、直径約30cm の幹で、高さ約15m の樹木がみられる場合がある。

２　遺跡保存庭園の調査

遺跡保存庭園の窪みは、以前に発掘調査されている（北大調査団1955）。地表からの調査では、標高約10m に存在した地形、河谷（南西方向から北西方向に蛇行していた河川の流路と考えられる）、円形および隅丸方形の窪地（長軸約４m ～約８m）の規模が確認、報告された。窪地は、今日でいう竪穴住居址（竪穴様式の住居と表記）と推測され、約83基の内、７基が発掘調査された。窪地に堆積した地層では、地表下約20cm の位置までで、黒色土層、樽前山ａ火山灰の層、黒色土層の三つが確認された。現在では一部の窪地が地表で確認できる状態である一方、調査当時は、現在よりも明確に窪地の分布が観察できたようである。

３　竪穴住居址の様相

近年、構内では、擦文文化の竪穴住居址が調査されている。当該の竪穴住居址は、客土の下位で黒色土層が円形もしくは隅丸方形状に平面分布している様子から確認できることが多い。約20cm の幅の黒色土層には、中位に樽前山ａ火山灰が約１cm ～約３cm の幅で挟在されている。竪穴住居址の竪穴が土層で埋められていく過程で、旧地表面付近で火山灰が堆積したと考えられる。火山灰を含む黒色土層は本来、竪穴住居址の外側まで連続して堆積したと推測できる。しかし、近代に平たんに造成された際、当該黒色土層が削られ、失われている場合がほとんどである。客土の下位で堆積した当該黒色土層、火山灰の様子は、1955年に報告された窪みでの堆積層と、層序でほぼ同様といえる。構内では、遺構の内外を覆ったと考えられる地層の特徴、重なる順序が同じ場合、相異なる遺構をほぼ同じ時期と判断でき

る傾向がある。当該黒色土層が同じ特徴、層序と仮定できるならば、両遺構（擦文文化の竪穴住居址と遺跡保存庭園の窪み）の時期は大枠で同じと推測できる。なお、構内の竪穴住居址では、葺き土が崩落したと考えられる地層、床面に堆積した地層が当該黒色土層の下位で確認されている。

構内では擦文文化の竪穴住居址の構築面は、火山灰を含む黒色土層の分布範囲よりも二回り外側で確認される。黒色土層の残存状態にもよるが、約0.5m ～約１m 外側である。遺跡保存庭園の発掘調査報告で示された窪み83基の長軸規模（北大調査団1955：第１表）と、擦文文化の竪穴住居址の調査知見とを照らし合わせると、遺跡保存庭園の地下に埋まっている竪穴住居址は、長辺が約５m ～約９mの竪穴規模と考えられる。

写真４　地表で観察できる窪み

おわりに

雪融け時の河谷、高まりの有様を概観し、高まりにある窪地が竪穴住居址と推測、調査されたことを説明した後、最後に、竪穴住居址とされる窪地が長辺約５m ～約９m の竪穴規模であることを推測した。本稿で紹介した遺跡保存庭園の様子である。春先は、窪地の形、旧地形がもっとも観察、想像できる機会である。

（札幌市在住）

〔文献〕

北大調査団，（1955），北大遺跡について．北方文化研究報告，第十輯，pp.1-26，北海道大学北方文化研究室

事 務 局よ り

(1) 第９回学会賞・奨励賞の推薦について

北海道考古学会規則第５号にもとづき、下記の要領で北海道考古学会賞・北海道考古学会奨励賞の候補者の推薦をお願いします。

１）北海道考古学会賞

趣旨：北海道およびその周辺地域の考古学（関連学問分野をふくむ）の研究、もしくは北海道考古学会の発展に大きく貢献した会員または団体の功績を称える。

候補者の要件：北海道およびその周辺地域の考古学（関連学問分野をふくむ）の研究、もしくは北海道考古学会の発展に大きく貢献した会員または団体（所属会員の有無を問わない）。

２）北海道考古学会奨励賞

趣旨：北海道およびその周辺地域の考古学（関連学問分野をふくむ）の研究に大きく貢献した若手研究者の研究活動を奨励する。

候補者の要件：北海道およびその周辺地域の考古学（関連学問分野をふくむ）において優れた研究を行い、将来の発展に貢献すると期待される満40歳未満（受賞年の４月１日現在）の会員。

３）推薦の方法（北海道考古学会賞・同奨励賞）

①推薦：自薦および他薦とする。

②締切：2023年１月31日（火）（必着）。

③所定の応募用紙を学会ホームページからダウンロードし、学会事務局あてに郵送もしくは電子メールで送付する。

【送付先】北海道考古学会事務局

〒069―0833 江別市文京台11番地

札幌学院大学人文学部人間科学科 臼杵研究室気付

メールアドレス：hokkaidokoukogakkai@yahoo.co.jp

④北海道考古学会賞選考委員会（副会長、運営委員２名、一般会員２名から構成）が、応募書類をもとに各賞の趣旨に沿って業績を総合的に判断して選考する。

４） その他

①北海道考古学会奨励賞受賞者に贈呈する研究奨励費は５万円とする。

②受賞式出席にともなう交通費は支給しない。

③応募書類は、返却しない。

④個人情報は、各賞の選考以外の目的で使用しない。

＊学会賞・奨励賞の規則は、『北海道考古学だより』109号、ホームページ参照。

(2) 会誌「北海道考古学」第59輯の投稿について

『北海道考古学』第59輯（2023年３月刊行）は特集を組まず、一般号を予定しています。会員の皆様からのご投稿をお待ちしております。

原稿の締め切り日は下記のとおりですが、投稿を希望する方は、編集の都合上、10月７日（金）までに会誌編集委員会事務局まで電子メールによる連絡をお願いいたします。

学会ホームページまたは『北海道考古学』第55輯（2019年３月刊行）に掲載されている原稿の分量・体裁等を厳守の上、ご投稿ください。

投稿希望連絡先　hokkaido.kokogaku@gmail.com
エントリー締め切り日　2022年10月７日（金）
原稿締め切り日　2022年11月21日（月）（必着）
原稿送付先　投稿希望をいただいた方には個別に会誌編集委員よりご連絡いたします。

(3) だより掲載の《研究活動・動向》の原稿の募集について

だよりでは会員の皆様の研究活動や最新の動向などの寄稿を募集しております。だよりの紙面を用いてPRしたい各地の注目される遺跡・遺物の発見、未報告の寄贈資料や寄贈者の紹介、研究動向などを掲載できます。詳細につきましては、以下を参考にしてください。

希望される方は各地域委員もしくは運営委員、学会ホームページに記載されております学会メールアドレスまでご連絡ご相談ください。

字数：600 ～ 800字程度（※写真・図版の量で調整）
図版：１ ～ ４枚程度（ただしモノクロに限る）
頁数：１ ～ ２頁ほど、文量については調整できます。ご相談ください。
条件：写真や図などは掲載の許可を確認してください。
備考：希望者多数の場合は次号以降での掲載となる場合がございます。早めの掲載を希望される場合は、その旨をお知らせください。

(4) 運営委員の募集について

現在、運営委員については、定員数16名以内に対して、９名で運営をおこなっております。学会の運営に携わってみたい方、運営にご協力いただける方のご応募をお待ちしております。なお、運営委員会で運営委員を追加選出した場合は、HPやだよりなどで会員に周知することといたします。

(5) 会費納入について

当会の運営は、会員皆様の会費で成り立っております。ここ数年、会費未納者が多くなってきております。本年度会費は、前年度会費納入制（2023年度）になっておりますので、速やかな会費納入にご協力をお願いいたします。会費未納額が増えると当会の運営や活動を縮小せざるを得なくなってきます。会員の皆様のご理解とご協力御お願いします。

また、2023年度（会費前年度納入制）を除く、過去３年以上の会費未納の会員には、北海道考古学会誌の送付を控えております。事務局では、未納会費の納入を確認した後、納入年度の開始を送付いたしますのでご理解ください。

郵便局口座番号：02770-6-8358　　加入者名：北海道考古学会
年会費：（一般）5,000円、（学生）3,500円

【会費未納会員への連絡】

会費多額未納の員は、速やかに事務局までご連絡いただき、会費納入の相談をしてください。なお、場合によっては、会費未納者に運営委員会から直接ご連絡を差し上げることがありますのでご了承ください。

北海道考古学会だより　　第132号　　2022年８月31日　発行

発行所　北海道考古学会（ホームページ：http://haa.main.jp/cms/index.html）

事務局：〒069-0833　江別市文京台11番地札幌学院大学

人文学部人間科学科　臼杵研究室気付　北海道考古学会事務局

E-mail：hokkaidokoukogakkai@yahoo.co.jp

印　刷　北海道図書企画　　(011)668-1131